

ソメイヨシノ

会社をやめたばかりの人間にとって桜並木を歩むという行為は、業苦の薫りをむりやりかがされるに等しい。満開のソメイヨシノなんてまったくどうでもよく思えた。むしろ花弁が目に入らぬように顔をそむけていたくらいだ。匂いが気になったのはそれが理由だったのかもしれない。

あのムズムズした花粉は嫌でも何かを反省せよと迫ってくる。

そういう気持ちで改めて眺めてみると川面に浮かぶ花びらも枝に咲き誇る花びらも過去に見たものとはまるで違っているのだ。春になれば新しい生活が始まりスケジュールで手帳は真っ黒になる。それが去年まで浪人したことも就職に失敗したこともなかった私には当たり前のことだった。たとえ志望した高校や大学や会社でなかったにしても気分を切り替えて新しい生活に順応していったものだ。そして桜はなんとなく人に希望を与えると勝手に思い込んでいた。

吉野山から移植された古木の根元には小ささまざまなブルーシートや莫塵（ゴザ）が据えられていた。昼間だというのに酒の匂いがぶんぶんとして携帯のカラオケマイクからきこえてくる音が味噌や醤油の匂いと入りまじって充滿していた。呑んで歌う人々は莫迦（バカ）らしくもあつたが懐かしくもあつた。ぼかぼかしはじめた陽気はそのまま私の気分だった。失業は必ずしも苦痛や不安であるばかりでなく弛緩であり脱力であつた。そうしてぬるい気分になることが失業の醍醐味であるとともにそこから抜け出せなくなる落とし穴でもあるのだが。

散歩道は由緒のある庭園から続いていた。流れに沿ったなんともいえない感じのカーブを形づくり、大論理学者や瞑想にふけることで乱世を忘れた高僧や数々の賢人たちもこの小川の彎曲やさらさらした水の流れを視界にとらえていたに違いなかった。この舗装されていない剥き出しになった小道を歩くのは、いつも白っぽい軽装だった翔子と一緒にあつたような気がする。それ以外にも用事で歩いたことはあるかもしれないが、しっかりと川筋を見ながら歩いたのは、肩を並べた翔子と一緒に歩いた時で、その後もたびたびそこを歩むと、決まって記憶とともに翔子が現われる。それはそうだ。そもそもこの道は或る大論理学者のエッセイから彼女が発掘した道であつたからだ。いろいろと古代からの文献を翔子が調べているうちに、その道は各時代にわたってさまざまなエッセイに現れた。とはいへ平安朝や室町などはいにしへの言葉で綴られていてわたしなどはすぐに倦んで投げ出してしまふのだが翔子は図書館に吸い寄せられて文献をひもといていた。それが昂じて卒業論文も小道と川にまつわるものになつたようであつた。見せてはくれたのだが私はろくろく読みもしなかつたのだつた。そして「随分とまた平和な論文を書いたものだな」と嫌味とも受け取られかねない言葉を無造作に彼女に投げかける始末だつた。彼女はあゝの意味で

私の悪しき性格をも理解していたからさほど気にも留めずに笑っていた。ひとつにはサークル内において私は彼女の先輩であったということが大きな要因でもある。もし同級生だったら彼女も反発していたに違いない。翔子とはもう何年も逢っていない。就職活動をするようになってからほとんど疎遠になっていった。もともと翔子と私とは淡い関係でしかなかったから強いて逢わなければならぬということもなかった。それに図書館に行けば彼女は毎回同じ塔状の、ステンドグラスが嵌め込まれた喫煙室脇に座っていたから逢いたくなったらそこへ行けばいいだろうぐらいにしか私は思っただけで逢わなかった。私はヘビースモーカーだったので必ず喫煙室に入った。混んでいるときはそこで読むこともあった。喫煙室脇の座席は副流煙が流れてきたり匂ったりするので空いていることが多かったのである。いつの季節でも翔子は決まって桜の色の服を纏っていることが多かった。年中、春めいていた。それでも同じセーターやシャツを着ているのか、いつでも洗い立ての匂いに包まれていた。彼女から清潔を差し引いたら何も残らないほどに。私たちはたいしては図書館で落ち合つてろくろく本も読まずにレストランに行くことが多かった。仮に調べものをしていたとしても途中で終わらせてしまっていた。私が手持ちの金の有る時の話ではあるが。そうして月末になると私は急に金がなくなつて下宿代や教科書代に困るようになる。翔子から金を借りることにしていた。

翔子はうつつすらと困惑した笑みを浮かべて頬を赤らめながら数万円の札を渡してくれた。私は頭を掻きながら彼女から受け取る。もちろん数日後にはきちんと返していたのだがそういったことができる関係の女性にはいなくて、性的な匂いが私たちには全くないとは言い切れないものだった。

一度だけ私は彼女とカップ麺を食べたことがある。そんなものは私にとっては日常的なジャンクフードに過ぎなかったが、或る秋の夕暮に枯れ葉が竜巻状に舗道を駆け抜けるのを眺めながら翔子は生まれてから一度もカップ麺を食べたことがないと言いつたのであった。お湯の出でくる自販機は今では珍しいかもしれないがその頃は大学の構内にもあった。「そんなものを」と言いかけて自分もまた何年か前には抵抗があつたのを思い出した。

確かに中学生になる頃くらいまではジャンクフードに対しては抵抗があつたのである。体の中に人工物を入れたくないというような。それは煙草もそうであるしウイスキーもそうであった。翔子はもの珍しそうに自販機に近寄りコインを投入していた。左翼活動家が居座る自治会室には入れずに私たちは人通りの少ない古びたコンクリートの階段に腰を下ろした。もう何年も放置されているようにいつでもそこにあるポコポコにされたヘルメットの散らばつたのを横目にカップ麺を食べ始めた。ひとくち口にする。「おいしい」と翔子は頬を赤らめた。両手でぬくもりを味わうようにカップを握っていた。

「腹が空いていてこんなに寒いときには何でもおいしいだろうよ」私は自分の気持ちとはほとんど関係のない妙にありきたりな言葉に自分でも戸惑っていた。

「ううん。先輩と食べてるから美味しんだと思う」

事はそれほど単純ではないのだ。たぶん私に対して間違つたイメージを抱いているのだ

ろうとその時は思った。そうした感覚を覚えるのは一度や二度のことではなく何度も逢ううちに積み重なっていったのだが私は彼女とじっくりと話し合うことはほとんどなくただ黙ったり互いの存在を確認しあうだけで時間ばかりがとめどなく経過していった。それはあたかもホームで環状線の列車が何本も来るのに乗らずに見過ごしているようなものだった。その時は列車は無限に来るぐらいに思っていたのだった。

日常の私の関心はその頃、別のところにあった。それははっきりと形に現れてはいないものであったが彼女によって解決する類のものでないことは明らかだった。もっと漠然としていてつかみどころのないものであった。それがためにさまざまな本を読んだり就職活動を始めたりにしていたのだ。会社を辞めると私はまた学生だった頃に逆戻りしている気分になった。当然といえば当然のことであるが私は再び何物でもない存在になった。のっぺらぼうという言葉があるが、そういう状態だ。ただそれは自覚がなければのっぺらぼうという言葉になって現れては来ない。ただ単に職がないとか偽学生の身分であるとか多額の負債を抱えているとかそういうことではないのである。けれどものっぺらぼうの状態が不快かといえばそうではない。繰り返しているかもしれないがそれはまた快樂でもあった。ただ私の性分に気づいている他人、そんな話はまったくしたこともないのに嗅ぎつけている他人が翔子であったように思われてならない。彼女は何らかの解決策を体得しているのだ。そして時折はちらつかせていた。私は快樂を奪われるのを怖れていたかもしれない。翔子とは関係性を持ちたくはないという確信があった。それでも彼女に魅かれるというものは彼女が美しいのも可愛らしいのもなんでもなくてただ一緒にいて心地よいという別の快樂だけであった。(実際は彼女は可愛らしい。ただ笑顔はあまりなくありきたりというと能面のような。仲間たちは埴輪と呼んでいた。彼女は見事なまでの一重まぶたでどんなに矯正しても無理な気がした)

奇妙なことだが私は翔子の視線によって私自身について考えるようになった。私は私自身にはそれまではさほど関心がなかった。翔子と知り合ってから明らかな彼女の錯誤、私に関する誤った上滑りな虚飾が私に関しての違和感を惹き起こした。では翔子のイメージが間違っているとしたら本当の「私」とはどんな奴なのだろうか？ いやもつと以前の今とは時代が異なる季節、暴力が今よりもずっとはびこっていた時代の私は、時代に即して粗暴な奴だった。もちろん今ではすっかり影を潜めた。それは翔子のおかげでもなんでもない。粗暴な私は消滅しただけの事であって翔子が嗅ぎつけた私はおそらくは粗暴でもなんでもないだろう、そこまで考えてきて、ふと立ち止まる。

「先輩は、ですね、罪つくりな人なんですよ」

罪、比喩的な言葉で罪という言葉を操る人間は決まって文学かぶれと私は感じてきた。しかも罪つくりときた。これほど悩ましげな多義的で主観性しかないような言葉があるだろうか。なぜなら法で定めた罪ならば心当たりはまったくない。ならば道徳的か宗教的な意味しかないではないか？ 言われた方は何の事やらわからず戸惑うばかりだ。そうしてまた自分について考えてしまう。私は自分についてはそもそもあまり考えないタイプの人

間であったわけだ。ただ、それも今回はまりこんだトラップによって事情が違ってきた！

私は、この不景気と言うのに職を失ってしまったわけだから。

類似した状況によって私は翔子との関係を思い出した。もちろん翔子との関係は思い浮かんだことばかりではなくそれなりの修羅場もあった。いつもいつも穏やかに微笑んでいただけではなく、彼女も泣いているときも怒っているときも罵声を浴びせかけてきたときもあったのだし私にしたって長い歳月のうちには嫌味を言ったり定言的な彼女の声に反発を覚えたり頬を張りたくなったりするときもあった。けれども図書館という場所があるせいかそこに戻ると私たちは居酒屋で罵り合っていたことなどはすっかり忘れてしまい会話することも忘れて互いの時間を共有することに没頭した。どうしても私は自分の関心のある書物には没入できなかった。私はドイツ法哲学史などという本を借りてきてもまったく頭の中に入って来なくて困惑した。人権宣言集も古代国語の音韻も翔子の姿が目にはいると途端に色褪せてくる。時折はさきほどの翔子の私に対する誤ったイメージから逃れたくてあがくのだが結局は解決できない難問を放り出してしまふのだった。それはそのときは良かった。だが世の常としていつも終わりは訪れる。いつまでも続くものなどはありはしない。ケインズではないけれども^Λ長期的にはすべて死すVである。

或る日、終わりは突然にやってきた。おそらくはその日の会話が原因だったと思う。私たちは何度目かわからないが川べりの土手を歩いていた。そこは舗装されていなくて今後も永久に舗装されることはなく誰が刈り込んだかわからないが中世から周囲の雑草は人工的なまでに刈り込まれていてむぞうさに転がる石も哲学的な意味があるような配置にみえる。いれかわりたちかわり現れる哲学者や数学者が石の配置を考えて現代にいたるまで連綿とその配置を思考してきたに違いなかった。

「わたしたちが生まれる数年前までは……」

穏やかにさらさらと流れる瀬音を聞きながら、うねりをもなった水を眺めながら、彼女は言った。

「この川に死体が浮かぶことがよくあった。生首もね」

そんなことはないだろう。私はあえて否定はしなかったが多少は身構えることになった。「だってそうでしょ。たぶん」無慙に転がる生首が千年後までも残る恨みを抱き目を向いているのだろうかと思うとぞっとしなわけにはいかない。

「どうして？」

「戦争が絶えなかったのよ」

「戦争か？」私はなんと答えていいものかわからない。

「このあたりの草は人間の生き血を吸っている。あの桜たちもね」
私はまったく興味がなかった！ だから黙っていた。

「刑場もあったのよ」

「……、それで？」

「平和な時代に生まれて、ずっと平和で良かったね。私たち」

「私たち？」

「違うって言うんですか？」翔子は私の手を取った。あたたかい掌だった。並んで歩いてきた私たちはいきなり向かい合う形になった。私は彼女の瞳が宗教的な輝きに包まれていると感じた。それは私の苦手とするところだった。何らかのものが彼女の背後に横たわっているのは明らかであったが、私は更にそれが何であるかは知りたくなかった。翔子は何か眩こうとした。私は掴まれていた掌をふりほどいた。そして意図しなかった凄まじい速さで彼女の口を塞いだ。彼女は面食らってもごもごと口の中で言っている。

「いいよ、いいよ。聞きたくないよ」私は自分の豹変に自分で驚いていた。だが、過去にも似たようなことはおびただしく起こしていたのだ。それはわかっていた。私は情緒が不安定なのだ。それは高校の頃にNという同級生の女の子から言われたことなのだが精神分析の本などを半可通に齧っていた子の意見だった。

口を塞いでいるにもかかわらず猶も何かを言おうとする。私にとっては斧を振りかざされたに等しい。それで私は今度は耳を塞いだ。私の指は彼女の唇を拭っていたようであり湿っていた。耳たぶでそれを感じた。

それはわたしの見せたはじめてと言っていていくらいの失態であった。後輩の、しかも清らかな翔子の前での弱々しさであった。けれども後悔はしていなかった。それ以上にどうしてこうなったのかもよくわからなかったのだが。

「そうなんだ。わかっているわよ」

翔子の瞳は今度は細長く禍々しい光を放っていた。目的を遂げられない口惜しさに満ちているといっても過言ではない。彼女のプライドはずたずたになったのだった。その何らかの背景がなければ私だってそんなことはしなかったはずだ。

「まったくイライラする人ね！」

「落ち着けよ。キミも僕も今日はちよっとおかしんだ」

「おかしなのは先輩でしょ！」

畳み掛けるように言う。

「どうして私の話を遮ろうとするの？ そんなにおかしなこと言いましたか？」

「言おうとしたじゃないか！」

「少なくとも聞いてからにしてくださいよ」

「聞かなくてもだいたいわかっているよ」

「どうして」

「僕にとつてはよくあることなんだ。キミにとつてははじめてのことかもしれないけど」

「絶対、そんなことはない。思い違いも甚だしいわ」彼女はとうとう腹を立ててしまった……

私たちは並んで歩いていたが手を繋ぐことなどはありえなかった。元来た道を黙って戻って行った。血のしたたる生首の話などしたのがいけなかったのだと私はうらめしげに彼女を見た。彼女の歩みはだんだんと遅くなっていく。彼女の体重は数倍にも重くなってい

く。私はそれをひきずっているように感じる。坂道を笠地蔵を引つ張り上げるように。この感覚は絶対に男でなければわからない。私は次第に重さに耐えかね、彼女を小川に捨てることにした。そう、それはもちろん比喩に過ぎないわけだが、私は重くなった彼女はもう走れないことはわかっていた。陸上選手でもない限り、私に随いて走ることができないだろうと過去の経験からわかっていたのだ。もう就職活動が始まるのだ。私はサークルに退部届を出して部屋に行かなければいいのだった。私の中で話は決まった。

「ちよつと用事を思い出したよ」私は小走りに駆けはじめ。二、三步翔子は歩み寄った気配を感じたが、予想通りもう彼女は走ることはできなかった。川にこそ投げ込まなかったが土手には置き去りにしたのだ。私はあとさき考えなかった。ふと翔子にはどうして女ともだちがいらないだろうと思つたが彼女は何を言おうとしたのかは気にならなかった。それは聞いてしまえば受け入れなければ仕方がないような事柄に決まっているからだつた。

二、三日の間、私は就職活動のスケジュールを手帳に記入するのに忙殺された。それまでは瞑想を書き記すような手帳は俄かに現実社会に埋め尽くされていく。しなければならぬことは山のようにあつた。彼女のことを忘れてしまったわけではないが、考えないようにつとめて現実に向き合おうとしていた。ただ月初の予定にまで遡つて手帳を繰つていくとはたと気が付いた。彼女に返さなければいけない金がいくらかは残つていた！ それは数千円くらいだったかもしれないが（今となっては正確には思い出せない）とにかくくらかは残つているのだった。ただ、翌週までは居酒屋で働いたバイト代が入らないのでどうすることもできなかった。それでもひとこと何か言いたくなって私はいつものように図書館への道を歩き始めた。足取りは軽かった。自分でも何を考えているのだろうと思わざるを得なかった。たぶん彼女は何事もなかったかのように喫煙室脇に座つて古典文庫などをめくつているだろうと勝手に思つていた。だがラケットを持ち込んで大声で話しているマナーの悪い連中がいるだけで長い古いテーブルのいつもの場所は彼女の不在を示すように空席になつている。私ははつと胸を撃たれたような気分になつた。とうとう私は彼女のイメージをみずから打ち砕いてしまったのだと改めて思い知らされた。それで逢つたところで渡す金もないのに私は彼女に言葉を掛けた一心で図書館の隅から隅まで春色の衣裳を目印に翔子を探し始めた。何もずっと本を読んでいるとは限らない。書庫に入つているとかカウンターで借出の手続きをしているとかさまざまなが考えられた。今までだつて彼女がそうしていたことはあつた。だが、円窓の脇にもカーブした書庫にもカウンターにも翔子を認めることはできなかった。毎日来ているのだから同じサークルの人たちはいたが彼らと会話することはもう久しく避けていた。彼らは私や翔子のこととは心の中ではあざけつていたに違いない。だがもうそんなことはどうでもよかつた。私は自分を落ち着かせようと努め、もう翔子を探さないと決めた。そうすると読む気もないのに借りて延滞したままの何冊かの本があるのも思い出した。カウンターにいるボクサー崩れの図書館員は毎日来る私のことを憶えているだろう……彼の顔がこころなしか笑つているように思えた。

そこで見事なまでに私の記憶は途絶えてしまう。それから何度か同じように図書館に足を運んだのだがついに彼女を見かけることもなく金も返すことなく終わってしまった。私はサークルの部室に退部の手続きのために訪れたがやはり翔子の姿はなく、その時は彼女がどうしているのかを他の部員に訊く気力もなかった。私は何社も会社訪問しては面接で落とされた。書類はそこそこ評価されたのだが内定はなかなか出ずに焦っていた。そういう事情もあって翔子のことはその時は忘れ去られてしまったのだ。

ただこうしてあの散歩道を歩いていると彼女のことを思い出さずにはいられなくなった。あれからすでに五年が過ぎて今さら図書館に行っても彼女の姿がないばかりか図書館それ自体がすでに新しいものに建て替えられていると時折届く会報に告げられていた。新しい図書館は最寄駅からもはっきり見えるほど巨大なものだった。図書館の庭にはお決まりのようにソメイヨシノが植樹されているだろう。私は彼女にもう一度逢いたいと思いはじめた。それでこうして散歩道を歩いているのだが、さらさらとした流れの中に生首をヴィヴィッドに感知することもなくなった。ただ漂う漠とした日々の中で何か目的のようなものほしただけなのかもしれない。そうして私は目的もなく都会の中心部へと走る電車に乗ったのだがそれは途中からは地下鉄になっていて（そんなことはとうの昔から知っているのだが）あたかも地獄行きの電車に乗っているような嫌な気分させられるものであった。

注。まだ携帯電話とかパソコンのなかった時代の話であり人が別れると探し出すのは容易ではなかった。